

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 4月 24日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21610004

研究課題名（和文）保育所をコミュニティ資源として親子の抱える課題に応える体験型支援実践の形成

研究課題名（英文）Developing the experience based parenting support practice for helping parent and child work on their difficulties making use of a nursery as community resource.

研究代表者

當眞千賀子（TOMA CHIKAKO）

九州大学・人間環境学研究院・教授

研究者番号：60311148

研究成果の概要（和文）：現場の人々とともに実践を形成していく過程の中に研究を織り込む「形成的フィールドワーク」（當眞，2004）の方法により，保育所の子育て支援現場で親子が抱える問題を多角的に把握しつつ、親としての力量を育て，親子が互いに育み合えるような関係を築くことを支える体験型の支援実践の工夫を重ね、親子の課題に応えるワークショップ型（体験型）の子育て支援実践モデルを開発した。

研究成果の概要（英文）：

This research developed the experience based parenting support practice in order to help parent and child work on their problems and difficulties, using the method of “formative field work (i.e., practice-creating-collaborative-fieldwork)” (Toma, 2004). This method interweaves research into the process of generating practice in collaboration with people in the field. The process of developing the model practice involved 1) identifying problems and difficulties the parent and child are facing, 2) cultivating the ways to provide the hands-on experience to the parent and child so that they are able to build the mutually nurturing relationship and the mother is able to build her parenting competence.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,700,000	1,110,000	4,810,000

研究分野：子ども学（子ども環境学）

科研費の分科・細目：

キーワード：コミュニティ、体験型子育て支援、形成的フィールドワーク、異年齢保育、発達、社会文化的営み

1. 研究開始当初の背景

家庭や地域の教育力の低下と急速な少子化、都市化にともなう養育・教育上の諸問題

が噴出する中、中教審の『少子化と教育に関する小委員会』は「社会全体で子どもを育てていく」ことの重要性を指摘しているが、その実現にはまだ多くの課題が山積している

のが現状である。この問題に取り組むためには、総論を超えて、実践可能な具体性と学際的視野に立った実践モデルの構築と子どもと親が育つことを支える実践の形成ノウハウの蓄積が必要であり、現場にしっかり根を下ろしたうえで、特定のローカリティを超える示唆を含むような一連の研究を多角的に展開していく必要がある。

このような問題意識と全体構想にもとづき、研究代表者は、科学研究費補助金を受けて（課題番号 18530503、平成 18 年～19 年度）、ある公立保育所を拠点とし、「形成的フィールドワーク」（當眞, 2004、詳細後述）を方法論として、保育所職員との協働で、異年齢編成による縦割り保育の導入を軸とした実践形成型の研究プロジェクトを展開した。

このプロジェクトを通して、0 歳～6 歳までの異年齢の子どもたちの中で育み合う関係性が育ち、同年齢集団保育では実現が難しかった情緒、意欲、認知、社会性の面での育ちを総合的に支援することが可能になった。

また、異年齢集団での保育カリキュラムの導入に並行して、その意義を保護者と共有するための保護者向けの講演や異年齢保育実践の保護者参観、保護者との懇談及び子育て相談を継続的に実施することで、保育実践の工夫による子どもの育ちと親としての学びを有機的に結びつけ、子育てと親育てを相乗的に展開することが可能になった。

さらに、このような重層的取り組みを研究者と協働して実現していく過程で、個々の保育士は子どもたちとかかわる力量を高め、実践形成力を身につけていった。そして保育士の間でのコミュニケーションも密になり、相互協力体制が充実してきた。この研究は、「社会全体で子どもを育てる」仕組みを作っていくための現場のひとつとしての保育所のもつポテンシャルを引き出し高める保育実践システムを構築しつつ、その形成過程を明らかにするものであった。

上述の研究は主に入所児童を対象としたものであったが、保育所はその物理的・人的・社会文化的環境としての特徴から、入所児童だけでなく地域の家庭の乳幼児とその親の育ちを支える実践を展開する上でも活用可能な優れたコミュニティ資源である可能性が高い。しかし、そのポテンシャルが十分に引き出され活かされているとはいえない現状にある。

一方、さまざまな場所で開かれている「子育て支援センター」や「子育て広場」は、多

数の親子に家庭外で遊びながら過ごす場や他の親子と接する場を提供してきた点でその役割は大きい。親として必要な力量を身につけることを含めた親子の育ちの支援という点では、必ずしも十分な機能を果たしているとはいえない。

乳幼児期の段階で、既に子育てに戸惑いと困難を感じながらもどうしていいかわからず苦悩している親が多数存在する現状を考えると、個々の親子が抱えている複雑かつ多様な課題を把握しながら、親としての力量を育み、親子の関係性を育てることを支援する仕組みを形成することは急務である。

以上のような子育てをめぐる社会的状況の理解と研究代表者のこれまでの研究成果を踏まえて本研究を企画した。

2. 研究の目的

本研究では、「子育て支援センター」が併設されている保育所での形成的フィールドワークを通して、保育士と協働して実践形成型の研究活動を展開し、以下の点を明らかにすることを目的とした。

- ① 子どもと親はどのような課題を抱えているか、
- ② 親としての力量を育て、親子が互いに育み合えるような関係を築くにはどのような支援実践が必要か、
- ③ 親子が必要としている体験を準備する上で、保育所の物理的・人的環境をどのように活用できるか、
- ④ 支援実践形成の過程で子ども、親、支援スタッフはどのような学びを体験するか。

3. 研究の方法

研究者が現場の人とは異なる役割を担いながら、現場の人々とともに実践を形成していく過程の中に研究を織り込む「形成的フィールドワーク」（當眞, 2004）の方法により、「子育て支援センター」が併設されている保育所を主なフィールドとして、実践形成型の研究活動を 3 年計画で展開した。

「形成的フィールドワーク」（當眞, 2004）とは、研究者が現場の人とは異なる役割を担いながら、現場の人々とともに実践を形成していく過程の中に研究を織り込むことにより、従来の基礎と応用という二分法的枠組みを超えた研究と実践の関係を構築する方法

である。従来の記述を目的としたフィールドワークと異なり、実践現場の人々との問題・課題の共有とそれを踏まえた実践の形成までを射程に入れたフィールドワークの方法となっている。

4. 研究成果

本研究では、親として育つことを支える仕組みが極めて脆弱になり、子育ての意欲があってもどうしていいかわからなくて苦しんでいる親が非常に多いという切実な課題に対して、研究者と現場スタッフの実践形成的な協働活動を通して具体的な子育て支援の手法をひとつひとつの事例を通して作り上げていくことで応えるという極めて実効性の高い成果が得られた。本研究の具体的な成果を以下に示す。

(1) 親子が抱える課題の本質を親が的確に理解し言語化できることは必ずしも多くないことがわかった。したがって、支援者は親からの口頭での相談内容に着目するだけでなく、室内・戸外での親子の観察やかかわりを通して親子の関係性の特徴や支援を要する課題を汲み取ることが極めて重要であることが明らかになった。

(2) 子どもとのかかわり方のモデルを観察する機会が著しく乏しい状況にある親の場合、ことばを介した面接相談だけでは具体的な子育て実践の改善に繋がりにくいことが明らかになった。

(3) そこで、研究代表者が、保育所の支援センターで遊びや昼食などの自然な活動の流れの中で親子の様子を観察し、親子にとっての課題を探りながら、直接子どもにかかわることを通してかかわり方をその場で工夫して、どう対応したらいいか具体的なモデルを示しながら母親に解説し、さらにそのかかわりを親子に体験してもらおうという支援実践を考案した。この手法は親としての力量を育て、親子が互いに育み合えるような関係を築くことに大きく貢献した。

(4) 子育て支援センター担当の保育士には研究代表者の親子への支援的かかわり方に直接触れて体験的に学びつつ、母子の支援ケース記録を取ってもらった。記録を活用して研究代表者が助言し、助言を活かして保育士が支援を試みるというサイクルを重ねる方法をベースとして、保育士に記録の書き方、親子の抱える課題の見立て方、支援的かかわり方について学んでもらおうという保育士の学びを支える実践を考案した。

(5) 研究代表者の親子への支援的介入に直接触れて体験的に学ぶこと、それを参考にしながら支援的介入を試みることで、効果的な記録の取り方を学ぶこと、研究代表者から支援実践への助言を得て実践を自ら工夫することといった一連の活動が、親子の課題に応える支援に必要な保育士の学びのプロセスとして効果的に機能することが明らかになった。

(6) 研究代表者と保育士による親子の課題の的確な見立てと支援的介入の工夫、及び記録の蓄積は支援実践を充実させ、多くの母子が互いの成長を引き出し合うかかわりを身につけていった。このような経過の中で平成21～22年に支援センターを利用した親子のうち28人の母親が第二子を出産している。

(7) このような子育て支援実践を通して親子が必要としている体験を準備する上で、保育所は極めて豊かなリソースとなり得ることが明らかになった。

① 所庭で親子が保育所の子どもたちと一っしょに過ごしたり遊んだりすることで、親は多様な子どもたちの姿に触れることができた。また、子どもたちも保育所の子どもたちと触れ合うことで体験の幅を広げることができた。

② 本研究で実現した保育士の学びのプロセスを体験することにより、保育士は親子の成長を支えるのに必要な支援の専門性を身につけることが可能であることが明らかになった。

③ 本研究を実施した保育所は子育て支援センターの役割を重視しており、2人の保育士を配置し、月曜日から金曜日まで毎日地域の親子を10組前後受け入れている。このような運営体制は継続的にかかわりながら親子の成長を引き出し支えるのに極めて有効かつ重要であった。

④ 本研究を実施した保育所では、研究代表者が保育所職員との協働で、異年齢編成による縦割り保育の導入を軸とした実践形成型の研究プロジェクトを行っていた(科学研究費補助金 課題番号 18530503、平成18年～19年度)。そのため、保育所の子どもたち(特に年長者)は支援センターにやってきた小さな子たちを自然に受け入れ豊かなかかわりをみせてくれた。また、保育所全体でプロジェクトに取り組んだことで生まれた保育士間の協力体制と信頼関係は、支援センター担当の保育士の活動を支える基盤となっていた。母子が互いの成長を引き出し合うかかわ

りを身につけていくことを支援するには継続的関与が必要であるため、保育所母体の協働的運営体制や充実した異年齢保育を軸とした保育実践は地域の子育てを支えるコミュニティ資源としての保育所のポテンシャルを高める重要な要因となることが明らかになった。

以上、本研究では個々の親の抱える課題を探りながら実質的で具体的な支援の手法を開発することにより、多様なケースへの適切かつ効果的な支援実践モデルを提供するとともに、保育所の物理的・人的環境のポテンシャルを引き出すことが可能になった。そして継続的支援実践により母親が親としての力量を高め子育てに自信と喜びを感じるようになっていったケースが多数生まれた。保育所の子育支援センターを活用して母親が子の理解を深め、子の発達を支えるようなかわり方を身につけ、親としての力量を高めることを可能にする実効性の高い子育て支援実践を形成するという極めて重要な成果を得ることができた。

引用文献

當眞千賀子(2004). 問いに導かれて方法が生まれるとき：形成的フィールドワークという方法 臨床心理学 vol. 4, no. 6, 771-782.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計3件)

- ① 當眞千賀子、実践の仕組みを育む過程で織り成される『みること』の綾～公立保育所における異年齢保育の導入を軸とした形成的フィールドワークを通して～、日本保育学会、2011年5月21日、玉川大学
- ② 當眞千賀子、保育士の学びと親子の成長を支える体験型子育て支援実践の形成I ～親子の抱える課題の見立てと支援実践を育む形成的フィールドワーク～、日本発達心理学会、2012年3月9日、名古屋国際会議場
- ③ 當眞千賀子、異年齢保育を軸とした保育所での村づくりと大震災、日本発達心理学会、2012年3月10日、名古屋国際会議場

[その他]

保育所、児童養護施設、里親大会、保育・幼児教育全国フォーラムなどでの講演・研修で

成果を還元した。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

當眞千賀子 (TOMA CHIKAKO)

九州大学・人間環境学研究院・教授

研究者番号： 60311148